

健康

排尿障害 認知症も疑うべき

頻尿や尿失禁などの排尿障害と、歩行障害。高齢者に多いこれらの症状は、認知症と関係している場合がある。東邦大学医療センター佐倉病院(千葉県佐倉市)脳神経内科の榊原隆次教授は「薬で治療可能な症状も少なくありません。年のせいだと思わずに、認知症なども疑ってみることが大切です」と話す。



認知症に伴う代表的な排尿障害 (榊原隆次教授への取材を基に作成)

加齢のせいにせず早期受診を

認知症タイプで症状異なる

認知症に伴う排尿障害は、就寝後に2回以上トイレに行く夜間頻尿、突然表れる尿意切迫感、トイレに間に合わない切迫性尿失禁が代表的。歩行障害も重なっている場合が少なくない。

榊原教授によると、認知症のタイプにより、目立つ症状は異なる。アルツハイマー型認知症では認知症の症状が強く、排尿障害や歩行障害は目立ちません。反対に、脳血

管性認知症は排尿障害と歩行障害が強く出ます。レビー小体型認知症は、認知症、排尿障害、歩行障害のいずれも目立ちます。認知症が脳血管性の場合、排尿機能に關わる神経がある、脳の前頭葉で血流が低下。レビー小体型は排尿や尿をためる機能を担う脳の基底核と呼ばれる部分に異常が生じるため、排尿障害が起きやすいという。

発病の前触れか

排尿障害の診断には、ほつこう機能を調

べるウロダイナミクス検査や、超音波を使った残尿測定検査などを行う。また、腰部脊柱管狭窄(きょうすく)症や糖尿病、男性の場合は前立腺肥大症など、排尿障害の原因となる他の疾患がないかも調べる。

治療では、β(ベータ)3刺激薬でぼうこうの筋肉への不要な刺激を減らし、尿意切迫感や頻尿などの症状の改善を目指す。「従来の抗コリン薬と違い、認知機能の低下に影響する心配がないので、現在は広く使用されています」と榊原教授。

認知症が進行すると、排尿障害がなくても、認知機能や運動機能の著しい低下から尿失禁が起こるようになる。「患者さんの排尿ペースに合わせた周囲の声掛けや、超

音波による残尿測定器の使用、おむつやパッドをつまぐ利用するなど、QOL(生活の質)を高めるとよいでしょう」

榊原教授は「高齢者にありがちな頻尿や歩行障害は、脳の病気の前触れとも言われます。病気として捉えることで、治療や予防がある程度可能です。健康寿命を延ばすためにも、早期受診してください」と呼び掛けている。

東邦大学医療センター佐倉病院の所在地は、〒285-1874 千葉県佐倉市下志津564の1 電話043(462)8811(代表)。

がん治療で起こり得る副作用

ご存じですか

抗がん剤などによるがん治療で起こり得る副作用の一つに「腫瘍崩壊症候群」がある。命を脅かす状態になることが多い。福井大学医学部血液・腫瘍内科の森田美穂子助教に聞いた。

腫瘍崩壊症候群

- 急性白血病、悪性リンパ腫などの血液がん
- 腫瘍量が多い固形がん
- 抗がん剤の効果が高いがん(小細胞肺癌など)
- 分子標的薬など新たな治療薬が導入されたがん
- 腎機能障害
- 感染症や脱水の合併

(森田美穂子助教への取材を基に作成)

腫瘍崩壊症候群のリスク因子の例

ん発症すると、急激に状態が悪くなる。「治療は難しく、全死亡率は2割とされ、検査値異常に加え症状を伴うと死亡率は7割とも言われます。がんそのものに対する抗がん剤治療を中止せざるを得ない場合もあります。このため、腫瘍崩壊症候群のリスクがあるがん患者さんには、抗がん剤治療の開始前から積極的な予防策が必要です」

12〜72時間に発症

学療法薬(従来の抗がん剤)の副作用として知られてい

副作用の多くは、抗がん剤ががん細胞だけでなく、正常な細胞まで攻撃してしまつたために起こる。一方、腫瘍崩壊症候群は、がん治療薬ががん細胞を壊すことで、血液中のカルシウムや尿酸、リン酸などが過剰になり、腎臓に負担をかける。脱水や感染症の合併も起こり得る。また、急激に状態が悪くなる。全死亡率は2割とされ、検査値異常に加え症状を伴うと死亡率は7割とも言われます。がんそのものに対する抗がん剤治療を中止せざるを得ない場合もあります。このため、腫瘍崩壊症候群のリスクがあるがん患者さんには、抗がん剤治療の開始前から積極的な予防策が必要です」

「患者さんは何度もの血

メディカル



気持ちなどのように変化し